様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １２ 日現在

機関番号：３０１０７
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５３２０７

研究課題名（和文）故人との絆に地域風土が及ぼす影響：地域に根ざしたグリーフカウンセリングに向けて

研究課題名（英文）Effects of clutural climate on "Continuing Bonds": Building of grief counseling rooted in the communitiy

研究代表者
山中　亮（Akira, Yamanaka）

北海学園大学・経営学部・教授

研究者番号：２０３３７２０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,400,000円、（間接経費）　420,000円

研究成果の概要（和文）：”故人との絆”とは近年悲嘆研究の領域で注目されている概念で，死別後も故人との関係が永続していると感じられることを指す。これは多くの日本人に受け入れられている考え方だとされているが，一方で都市化が進む中で受け入れられなくなっているのではないかという指摘もある。そこで，本研究では，故人との絆のあり方に地域風土がどのように影響を及ぼしているのかを明らかにするため，祖霊崇拝の風土が色濃く残る津軽地方及びそのような風土があまり強くないと考えられる北海道，それぞれ出身の学部学生に面接調査を実施した。その結果北海道地方に比べて津軽地方出身の学生では，故人との絆を認める傾向が強いことが示された。

研究成果の概要（英文）："Continuing Bonds" with the deceased is a recent and interesting concept in the field of grief study. Most Japanese people, routinely accept that the bereaved remains connected with the deceased. However, in many Japanese cities, affirming the presence of the deceased, a belief that is related to ancestor worship, is disappearing. As a result, Japanese people maintain "Continuing Bonds" differently, depending on the area where they live.
Characteristics of undergraduates' attitudes toward the relationship with the deceased were investigated. Undergraduates in the Tsugaru area, where beliefs in ancestor worship are well established, and undergraduates in Hokkaido, where such belief are exceptional were compared. Undergraduates in the Tsugaru area and in Hokkaido participated in semi-structured interviews. Results indicated that undergraduates in the Tsugaru area felt stronger bonds with the deceased than undergraduates in Hokkaido.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：社会系心理学　臨床　グリーフ　地域風土

ぉも１．研究開始当初の背景

これまで欧米の悲嘆カウンセリングの領域では，Freud(1917/1970)が提唱した「喪の仕事」概念に基づいて，死別体験者が故人との関係を断ち切る，つまり故人との絆を放棄することができるように援助していくことが援助者の役割であると考えられていた。これに対して近年，故人との絆を保ち続けることは決して問題ではなく，絆を保った形で適応的な生活を送ることも十分可能なのではないかという，「継続する絆(Continuing Bonds)」概念が提唱された(Klass, Silverman, & Nickman, 1996)。このような故人との絆を保ち続けるという傾向は，日本人に特徴的であることがいくつかの研究で指摘されている(Bowlby, 1980/1981)。また波平（2004）は日本人の伝統的な死のあり方について，「死者を想定する文化」があると指摘している。こうした日本人の死生観について，霜山（1985）は「連続空間的な他界観」という言葉を用いて説明している。日本では死後残った魂が遠い所に行かず，比較的近いどこかにいるという考え方があり，連続的で水平的な空間の中に限定された水平的他界観が特徴としてあることを指摘している。このように，従来の日本人にとって故人は比較的近くにいて，何らかの関わりを持ち続ける存在として考えられてきたといえる。しかしこれまでのところ，こうした文化の言説を死別体験者がどのように取り入れて死者との絆を継続していくのか十分な検討はなされていない(川島，2008)。

近年わが国においても，特に都市部では祖霊崇拝的な概念は風化してきていることが指摘されており，そうした風土が色濃く残っている地域とそうではない地域では，絆のあり方にも違いがみられるのではないかということが考えられる。しかし日本における故人との絆のあり方と地域風土との関連について，これまでのところ，実証的な研究は行われていない。

東日本大震災を契機に，死別後の悲嘆への心理臨床的援助の重要性が指摘されるようになってきた。ただし現状としては，先行研究において悲嘆や故人との絆のあり方の文化差が指摘されているにもかかわらず，わが国では欧米で発展してきたグリーフカウンセリングやグリーフケアの考え方がそのまま取り入れられてしまっている感が否めない。

そこで，日本における故人との絆のあり方と地域風土との関連について実証的に検討を加えることによって，特に絆の放棄という目標に基づいて行われてきた従来のグリーフカウンセリングだけでなく，絆の継続といった視点を取り入れたグリーフカウンセリングも地域に即した形で取り入れることの意義を見出すことができ，多くの死別体験者に対するより効果的なサポートのあり方を示すことが可能となるとと考えられる。そのようなことから本研究は，臨床実践にも大いに貢献する研究となるといえよう。

引用文献：

Bowlby, J. (1980) *Attachment and Loss, Vol.3, Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子(訳) (1981): 母子関係の理論: Ⅲ 対象喪失　岩崎学術出版社

Freud, S. (1917) Trauer und Melancholie. Internationale zeidschrift fur arzriche. *Psychoanalyse*, 4, 288-301. 井村恒郎(訳) (1980): 悲哀とメランコリー　フロイト著作集 6　人文書院 pp.137-149.

川島大輔 (2008) 意味再構成理論の現状と課題―死別による悲嘆における意味の探求―　心理学評論，51，485-599.

Klass, D., Silverman, P. R., & Nickman, S (1996) *Continuing bonds: New understanding of grief.* Washington, DC: Taylor & Francis.

波平恵美子 (2004) 日本人の死のかたち:伝統儀礼から靖国まで　朝日新聞社

霜山徳爾 (1985) 黄昏の精神病理学―マーヤの果てに　産業図書

２．研究の目的

本研究は，祖霊崇拝の風土が色濃く残る津軽地方及びそのような風土があまり強くないと考えられる北海道，それぞれ出身の大学生が持っている故人との絆に対する考え方や態度などを比較検討し，故人との絆のあり方およびその変容プロセスに地域の風習，信仰などの風土がどのように影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(１)津軽地方における祖霊崇拝について：「川倉賽の河原地蔵尊」の実地調査

青森県北津軽郡金木町にある川倉賽の河原地蔵尊は水子供養を行う場でもあったが，若くして亡くなった未婚の故人のために，花嫁・花婿人形を遺族が奉納する場としても機能していることが知られている。そこで，この寺院を直接訪れて，奉納の様子などを調査することで津軽地方の祖霊崇拝のあり方を検討した。

(２)大学生における祖霊崇拝に関する故人との絆の継続に関する特徴：津軽地方と北海道の比較検討

①大学生における祖霊崇拝及び死・死別に対

する態度に関する検討
【対象者】津軽地方のＡ大学に在籍している津軽地方出身の学部学生 12 名（以下Ｔ群），北海道のＢ大学に在籍している北海道出身の学部学生 10 名(以下Ｈ群)。
【調査手続き】半構造化面接を実施した。面接内容は調査対象者の同意を得て録音し，面接終了後，録音内容を再生して，以下の調査内容に関して述べられた部分について，逐語録を作成した。
【調査内容】基本属性，死別経験について面接を実施する前に調査票に記入してもらった。面接では，事前に準備した面接ガイドに従って，主に①死に対する儀式(葬儀，法事，墓参，仏壇，盆についてなど)，②死・死別に対する態度を中心に尋ねた。
【分析方法】面接で得られた発話をもとに，①に関しては，a)葬儀参列経験の有無，b)墓参の時期，c)仏壇へのお参りの時期，d)お盆の風習について分析した。②については，「死後どうなるか」について語られた内容を抽出し，“死者が何らかの形で存在する”，“存在しない”，“わからない”の３つに分類した。また墓・仏壇へ参る際に考えることについて語られた内容を抽出し，“挨拶・報告をする”，“見守ってほしいなどのお願いをする”，“報告とお願いの両方をする”，“特に何も考えない”の４つに分類した。

②大学生の故人との絆の継続に関する語りの特徴

【対象者】(２)の①の研究で対象となった者のうち，逐語録の作成が終了した津軽地方のＡ大学に在籍する津軽地方出身の学部学生 6 名，北海道のＢ大学に在籍する北海道出身の学部学生 8 名。
【分析方法】面接で得られた発話をもとに，各調査対象者の逐語記録を作成した。その後津軽地方・北海道の対象者別に KJ 法を参考にして，「故人との絆」に関する内容と思われる逐語内容を抽出して，カテゴリー化した。

(３)大学生の死後観に関する検討

【対象者】(２)の①の研究で対象となった者のうち，逐語録の分析が終了した津軽地方のＡ大学に在籍する津軽地方出身の学部学生 7 名，北海道のＢ大学に在籍する北海道出身の学部学生 8 名。
【分析対象】今回分析の対象としたのは主に，①に関しては「葬儀の意味」「お墓や仏壇でのお参りの内容」，②に関しては「現在，死んだらどうなると考えているか」について，語られた内容であった。

(４)親と死別を経験した大学生における，故人との絆の変容に地域風土の特徴が及ぼす影響

【対象者】親との死別体験のある，津軽地方のＡ大学に在籍する津軽地方出身の学部学生 1 名，北海道のＢ大学に在籍する北海道出身の学部学生 4 名。
【調査手続き】半構造化面接を実施した。面接の内容は調査対象者の同意を得て録音し，面接終了後逐語録を作成した。
【調査内容】基本属性，死別経験については面接を実施する前に調査票に記入してもらった。面接では，事前に準備した面接ガイドに従って，主に①死別体験の内容について，②故人との関係について，③死生観について尋ねた。なお，面接は１名につき１回で，面接時間は約 60 分であった。
【分析方法】面接で得られた発話をもとに，各調査対象者の逐語記録を作成する。その後故人との絆の変容プロセスに関する内容と思われる逐語内容を抽出して，カテゴリー化する。

４．研究成果

(１)津軽地方における祖霊崇拝について：「川倉賽の河原地蔵尊」の実地調査

川倉賽の河原地蔵尊に実際に訪れて，奉納の様子を調査した。
その結果，地蔵堂の様子から現在もなお，水子供養が行われていることが明らかとなった。
また，亡くなった未婚の故人のために，花嫁・花婿人形の遺族が奉納するという冥婚の風習が続いていることが明らかとなった。
以上のことから，津軽地方では故人のことを気にかけ，故人に対してさまざまな働きかけを行うという信仰・風習が残っており，故人との絆の継続を強く信じている様子がうかがわれた。
この調査結果については，北東北・北海道フィールドワーク研究会において発表し，多くの示唆を得た。

(２)大学生における祖先崇拝に関する故人との絆の継続に関する特徴：津軽地方と北海道地方の比較検討

①大学生における祖霊崇拝及び死・死別に対する態度に関する検討
【葬儀参列経験の有無】表１に示したように，いずれの地域においても調査対象者全員が葬儀に参列した経験があった。

表１ 葬儀参列経験の有無の比較

	参列経験あり	参列経験なし
Ｔ群	12 名 (100%)	0 名 (0%)
Ｈ群	10 名 (100%)	0 名 (0%)

表 2 墓参の時期の比較

	お盆	彼岸	年末年始	命日
T 群	12 名 (100%)	8 名 (66.7%)	2 名 (16.7%)	4 名 (33.3%)
H 群	8 名 (100%)	0 名 (0%)	0 名 (0%)	0 名 (0%)

【墓参の時期】表 2 に示したように墓参の時期について，お盆は T 群 12 名(100%),H 群 8 名(80%)，彼岸は T 群 8 名(66.7%),H 群 0 名(0%)，そのほか T 群では年末年始や命日の墓参もみられたが，H 群ではいずれも 0 であった。オッズ比が「彼岸」において 39.67 で，H群に比べてT群において彼岸時に墓参する者が有意に多かった。

【仏壇の有無】表 3 に示したように，仏壇が自宅にあるのは T 群 10 名(83.3%),H 群 4 名(40%)であった。オッズ比が 7.50 で，H群に比べてT群において自宅に仏壇がある者が有意に多かった。

表 3 自宅における仏壇の有無の比較

	仏壇あり	仏壇なし
T 群	10 名 (83.3%)	2 名 (16.7%)
H 群	4 名 (40%)	6 名 (60%)

【仏壇へのお参りの時期】表 4 に示したように，仏壇へのお参りの時期については，お盆 T 群 9 名(75%),H 群 5 名(50%)，年末年始 T 群 8 名(66.7%),H 群 4 名(40%)，彼岸 T 群 6 名(50%),H 群 0 名(0%)であった。オッズ比が「彼岸」において 21.00 で，H群に比べてT群において彼岸時に仏壇にお参りをする者が有意に多かった。

表 4 仏壇へのお参りの時期についての比較

	お盆	彼岸	年末年始	命日	日参
T 群	9 名 (75%)	6 名 (50%)	8 名 (66.7%)	4 名 (33.3%)	2 名 (16.7%)
H 群	5 名 (50%)	0 名 (0%)	4 名 (40%)	1 名 (10%)	0 名 (0%)

【お盆の風習について】表 5 に示したように T 群では，“墓や家の前で火を焚く”，“法界折を供える”など H 群では述べられない風習を述べる者が 11 名(91.7%)いた。オッズ比が 161.00 で，H群に比べてT群において「墓や家の前で火を焚く」「法界折を供える」などのお盆時の特別な風習を語る者が有意に多かった。

表 5 お盆の特別な風習の有無の比較

	風習あり	風習なし
T 群	11 名 (91.7%)	1 名 (8.3%)
H 群	0 名 (0%)	10 名 (100%)

【死後どうなるかに関する分類結果】表 6 に示したように，“死者が何らかの形で存在する”と述べたのは T 群 3 名(25%),H 群 4 名(40%)，“存在しない”と述べたのは T 群 5 名(41.7%),H 群 4 名(40%)，“わからない”と述べたのはT群4名(33.3%),H群2名(20%)であった。故人が何らかの形で存在するかどうかについての考えについては，両群で違いは見られなかった。存在すると考える者，存在しないと考える者，わからないと考える者がそれぞれ両群にいた。

表 6 故人の存在についての考えの比較

	存在する	存在しない	わからない
T 群	3 名 (25%)	5 名 (41.7%)	4 名 (33.3%)
H 群	4 名 (40%)	4 名 (40%)	2 名 (20%)

【参る際に考える内容についての分類結果】H 群では“挨拶・報告をする”が多かった(5 名;50%，T 群 0)。T 群では“報告とお願いの両方”が半数(50%,H 群 1 名;10%)，“見守ってほしい”のみが 3 名(25%,H 群 0)であった。なお“特に何も考えない”は，T 群 3 名(25%),H 群 4 名(40%)であった。$X^2(3)=11.63$, $p<.01$ であった。残差分析の結果，T群ではH群よりも「挨拶・報告とお願い(見守って下さい)の両方」する者が有意に多く，逆に「挨拶・報告」のみをする者が有意に少なかった。

表 7 仏壇に参る際に考える内容についての比較

	挨拶・報告	お願い	両方	特にない
T 群	0 名 (0%)	3 名 (25%)	6 名 (50%)	4 名 (33.3%)
H 群	5 名 (50%)	0 名 (0%)	1 名 (10%)	4 名 (40%)

以上の結果から，津軽地方においては，大学生という若年世代であっても，墓参や仏壇参りなどの儀式的行為が前世代から強く伝達されることによって，故人との強い絆の存在を肯定しやすくなっていると推察された。

津軽地方は北海道に比べて自宅に仏壇がある割合やお参りする割合が高く，祖霊崇拝の風土が比較的強く残っていると考えられる。死・死別に対する態度では，死ぬと存在はなくなると報告する者が津軽･北海道とほぼ同じ割合いるにもかかわらず，故人･先祖に「見守ってほしい」と思っている割合が津軽地方において高くなっており，故人との絆が北海道よりも強くあることが示唆された。

②大学生の故人との絆の継続に関する語りの特徴

まず北海道の大学生の語りについて，KJ 法に基づいた分析を行った結果，「故人への挨拶・祈願・報告」，「故人の現世帰還」，「故人との絆の継続の否定」，「故人のあり方の模索」，「故人との絆の継続への期待」という 5 カテゴリーが得られた。

次に津軽地方の大学生の語りについて，KJ 法に基づいた分析を行った結果，「故人への挨拶・祈願・報告」，「故人の現世帰還」，「故人との絆の継続の否定」，「故人に見守られているという感覚」，「故人との再会の場としての仏壇・墓」，「故人との絆の継続への期待」という 6 カテゴリーが得られた。

北海道で 5 カテゴリー，津軽地方で 6 カテゴリーが得られたが，内容の違いが明らかに見られた。津軽地方の大学生では「故人に見守られている感覚」というような，故人が自分に働きかけてくるという感覚を強く持っており，より故人との絆が強いことがうかがわれた。また北海道の大学生では「故人のあり方の模索」というように，故人との絆を考える前提となる，故人がどのように存在し得るのかについて定まった考えがもてない様子がうかがわれた。

以上のことから，津軽地方と北海道の大学生には，「故人との絆」の捉え方に類似点とともに相違点があることが明らかとなった。

(３)大学生の死後観に関する検討

まず葬儀の意味の捉え方について分類したところ，北海道地方では遺された側の情緒的コントロール(例：「気持ちを整理するため」)及び関係性の終わり(例：「お別れを言うため」)という観点から捉える割合が多く(7 名，87.50%)，津軽地方で半数以上が語った故人に着目した意味づけ(例「見送るため」)は 1 名のみであった。お参り(墓･仏壇)の内容）については，北海道地方ではそもそもその経験がほぼ無い者が 2 名(25.00%)，無心(何も考えておらず手を合わせるのみ)が 2 名(25.00%)であったのに対し，津軽地方では「見守っていてください」ということばがけを行うのが 5 名(71.43%)であった(北海道地方では１名のみ)。

以上より，儀式にみられる故人との絆については地域差がある可能性がうかがわれる。

次に自己の死への態度については，両地域とも「無になる，死ぬだけ」と語ったものが多かったが(北海道 5 名(62.5%)，津軽 3 名(42.86%))，津軽地方では同数の者があの世や生まれ変わりを想定していた。また北海道地方では独自の死後観を持っている者が 2 名(25.00%)いた。他者の死に比べ自己の死への態度について，地域差は顕著ではないと感じられるものの，死後の居場所を想定するかどうかについては若干の差があると考えられる。

最後に，自己の死への態度と他者の死に対する態度との関わりについて検討したところ，死後の世界を想定していなくても故人へ話しかけるというパターンはあるが，その逆，すなわち，死後の世界を想定していて故人に語りかけないという者は全体で１名のみであった。このことから，死後観が故人との絆に影響を及ぼすというよりはむしろ，死後観とは別に，故人との絆を持てるようにするために，参り方や風習などが形式的に伝えられているのではないかと考えられる。

(４)親と死別を経験した大学生における，故人との絆の変容に地域風土の特徴が及ぼす影響

親との死別体験のある，津軽地方の A 大学に在籍する津軽地方出身の学部学生１名，北海道の B 大学に在籍する北海道出身の学部学生 4 名の面接調査を行った。現在面接時に録音した音源から，逐語録を作成しているところである。今後詳細な分析を行い，故人との絆の変容について，詳細な検討を加える予定である。この点については今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

①<u>田上恭子</u>・<u>山中亮</u>（2012）．大学生の死後観に関する一考察－他者の死と自己の死との違いを中心に－　東北心理学会第 66 回大会

②<u>山中亮</u>・<u>田上恭子</u>（2012）. The features of undergraduates’ narratives about “Continuing Bonds” 2012 Asian Society of Human Services Congress

③<u>山中亮</u>・<u>田上恭子</u>（2012）．故人との絆に地域風土が及ぼす影響(1)－津軽地方と北海道の大学生を対象とした予備的検討－ 心理臨床学会第 31 回大会

６．研究組織

(1)研究代表者

山中　亮（北海学園大学・経営学部）

研究者番号：20337207

(2)研究分担者

田上　恭子（愛知県立大学・看護学部）

研究者番号： 80361004

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：